

ひすい

GSJ M16585



2 cm

GSJ M16586



「ひすい（翡翠）」は、古くから勾玉（マガタマ）などの宝飾品として使われてきました。漢字の「翡」はカワセミのオス、「翠」はメスの意味で、美しい緑や紅の羽根の色に因みます。展示の標本は、新潟県糸魚川市青海川上流橋立産で、優しい白の中に緑や青が散りばめられています。こうした色の変化や、控えめな光沢と確かな硬さに人々が魅了されたのは容易に想像できるでしょう。

「ひすい」は硬玉（コウギョク）とも呼ばれますが、科学的には「ひすい輝石」という鉱物が集まった「ひすい輝石岩」という岩石です。純粋な「ひすい輝石」は無色透明ですが、その細かな結晶が綾織るように組み合っているため、独特のもっちりした白色と強靭さをもちます。緑や青はクロムなどの微量成分か不純物（とはいえ、珍しい輝石の仲間や希少な新発見鉱物も含みます）が影響しています。

ひすい輝石岩は、日本列島のようなプレート沈み込み帯で蛇紋岩とともに産出します。これは地下深部の高い圧力と流体が関与した変成作用でできました。また、糸魚川市にある縄文時代の遺跡から出土したものは世界最古とされ、大珠（タイシュ）の穴から勾玉にいたるヒスイ文化の出発点でもあります。

こうした国産で美しいだけでなく、様々な分野でも重要性を持つ「ひすい（ひすい輝石およびひすい輝石岩）」を、日本の石すなわち「国石」として日本鉱物科学会が2016年9月24日に選定しました。また同年、日本地質学会による新潟県の石（岩石）にも選ばれています。

なお、「ひすい」には軟玉（ナンギョク）と呼ばれるものもあり、中国などで工芸品等に加工されてきました。これは、輝石ではなく角閃石の仲間からできています。 （地質情報研究部門 中川 充）